

2021年4月4日 聖餐式説教

十字架にかかり、亡くなられた主イエスはアルマタヤのヨセフという人が自分のために用意していたお墓に葬られました。聖書は、この世的に見れば主イエスは最後を遂げてしまった、もう再び人々の前に現われることはできない状況に追いやられたのだと記しています。お墓には大きな石が置かれました。番兵が見張っていて、石には封印がされていました。それは、人間的な全ての手段をもってしても主イエスを運び出すことは出来なかったとっているのです。翌日の土曜日は安息日でした。この日は歩く距離も仕事も厳しく制限されておりますので、皆主イエスに心を寄せながら、自分の家を離れるわけには行きませんでした。しかし、特に婦人達は香料の用意をしたり、心は決して安息してはいませんでした。

日曜日、待ち兼ねたように婦人達はお墓に向かいました。そこで復活のメッセージが語られることになるのです。復活のメッセージは以外に簡単な一言であります。すなわち、お墓が空であった、ということです。彼女達は主イエスの遺体に薬を塗るつもりでした。あの重い石を自分達が転がすことは不可能でした。誰が自分達のために石を転がしてくれるのだろうか、と歩きながら心配していたのです。しかし、墓に行くと石はすでに転がされておりました。しかも主イエスに遺体は見当たりませんでした。墓の中には白い長い衣を着た若者がおりました。この若者は主なる神から遣わされた天使でありましょう。この若者の言った言葉は重要であります。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と」。お墓は死んだ人のはいるところです。主イエスは亡くなられた、そしてお墓に葬られた、だから今でも遺体がお墓にあるはずだ。そう考えていた彼女達に、主イエスの真の姿を思い出させる言葉でした。ガリラヤ、それは主が伝道生涯をかけられた場所であり、聖書物語の舞台です。主イエスが十字架にかけられたエルサレムからガリラヤまで歩いてどんなに急いでも三、四日かかります。彼らはその距離も忘れてガリラヤへ向かいました。あの十字架の失望に沈んでいた人びとの心に、再び勇気と希望が湧き上がってきた。人間の力では到底なし得ない事実が、ここに起こったのでした。

主イエスは天国を伝えられました。それは、主イエスが今ここにいるから与えられる、ここにおられないから与えられない、そのような場所や時間に制限されたことではありませんでした、主イエスによって、涙を止めていただいた人も多くいました。しかし彼らは主イエスの努力によって慰められたのではありません。そこにおられたから慰められたのは確かですが、その後もう慰められることはなかったのではありません。主イエスの存在は、時間を越え、距離を越えて人々に救いをもたらしたのです。主イエスが十字架にかかれたことによって、すべてがなくなってしまうことではなかったのです。若者が彼女達に伝えたのは、私達の心に生き続けておられる主イエスを捜しなさい、死者のなかに主イエスを捜すのではなく、生きておられるその事実を受けとめ、伝える者となりなさい、恐れの中にとどまっているのではなく、その復活の喜びを伝えるものとされていきなさい、そう言っていたのです。

私たちは、死んだ者のなかに、主イエスを捜していることはないでしょうか。主イエスはもう天にお帰りになってしまった、今ここにはおられない、目に見えない、だから今の自分の境遇や苦しみ、そういうことを主イエスは救うことが出来ない、たよりにならない。そう考えるならば、私達はお墓のなかに主イエスを捜した婦人達と同じであり、震え上がり、正気を失った婦人たちと同じであります。それは、主イエスがお墓からいなくなったのはどうしてか、人間的に追及して、人間的に答えを出そうとすることです。主イエスの復活は、慰められ、強められ、福音を伝えられた者たちが、今もそしていつまでも主イエスが共にいてくださる、そして自分達はその証人なのである、そう受け止める者と共にあり、その事実を心に刻むものが、復活の主に出会えるのであると言っているのです。お墓が空であったというのは、私達が自分の常識や自信、そうしたことに縛られずに解放され、主イエスの存在や教えに心を向けることの大切さを示し、弟子達が体験した復活の主との出会いは、弟子たちだけのものではなく、全ての人々に与えられることを教えています。永遠に絶えることがないと言われた主イエスのみ言葉をはっきりと示したのが、主イエスの復活だったのです。

私達もまた、復活の主との出会いをこのイースターに新たにしたいと思いません。昨年につき、新型コロナウイルスの影響を受けながらのイースターではありますが、本年ならではの福音をしっかりと見出しつつ、自らの不自由さから解放され、共に復活の喜びを祝いたいと思えます。イースターおめでとうございます。